

齋藤 勲 昭和 41 年卒

「2012 北信越かがやき総体」の夏

若い OB 達と一緒に登ったインターハイの夏はかけがえのない時間だった。そして選手たちは優勝を勝った。宝石のように輝く今年の夏の思い出を記してみよう。

1) 支援隊員の募集 「人員不足の時は私が応募します」

2011 年 9 月 14 日、吉田先生への返信メールから、

「・・・暑いさなかのインターハイのサポート要員となると、やはり若い人の出番でしょう。ただ本番の日程が平日の為、サラリーマンは 5 日間もの休暇取得が難しいものと思われまます。べ切日まで必要人員が揃わないときは私が応募しますので、頭の片隅に置いておいて下さい。・・・」

インターハイ支援隊員募集で不足人員が出た時の為にと思い、吉田先生宛にメールしたものである。しかし、いの一に 64 歳の老体の私が支援隊員としてエントリーされてしまった。「シテヤラレタ。」

ただ、私自身は本校 OB が卒業後、山からすっかり離れてしまい、社会人になって登山や山スキーをしている人が一握りの限られた者だけなのがとても気がかりであった。この機会に現在の高校山岳部の活動目標の一つであるインターハイというものの実態をこの目でしっかりと見ておきたかった。

果たしてインターハイは日本の岳人の養成に役立っているのでしょうか？支援隊員としてインターハイを側面から手伝うことで何かが見えてくるであろう。

2011 年 12 月 3 日、支援隊員は最終的に 13 名が揃った。吉田先生の人徳というものであろう。

2) 登山行動

・2012.8.8 平標山（行動 1 日目） 「丸山医師はマラソンランナー」

昨日の開会式では本校選手隊の高橋 CL が立派に選手宣誓の役目を果たした。廣瀬 OB 会事務局長も開会式中アメリカから帰着し支援隊員は全員集合する。

朝からガスの中での登山となりそんなに暑くなく助かる。頂上付近は白山風露、細葉雑草、白山千鳥、下野草、姫シャジンなどが咲きお花畑になっていた。頂上手前から小雨が降り始める。

頂上から下山中、小雨に濡れた木道で一名の監督が転倒し怪我したとの伝言があり監督団が停止する。監督団を先導する森田君からも無線連絡が入る。支援隊副隊長の役目の私は最

後尾を歩く位置取りである。現状確認の為、前方へ急ぐ。現場へ到着する前に隊列が動き始めた。負傷者は自力で歩けるらしい。

随行の丸山医師の診断では手の指の脱臼とのことである。明日からの行動も支障ないとの話で安心する。丸山医師は豪放磊落な性格らしく、説明も的を得て分りやすかった。マラソンランナーでもあるとのことですから仲良しになった。

・2012.8.9 苗場山(行動2日目) 「雲尾坂での交差を回避せよ」

13Kmほどの登降の長丁場の今日も昨日同様3時起床、5時引継式、5時20分バス出発で行動する。今日も時々ガスに包まれ快適な登山が出来たが、問題は頂上直下、雲尾坂で起きた。監督団は行動開始後、3回目の休憩をお花畑でとった。先導する森田君は、すぐに先に行く選手団に追いつくとの思いがあり少し長めに15分の休憩時間とした。

悲劇はそのあと、雲尾坂を登っている時に笛木コース隊長の無線連絡で始まった。「先頭の出発時間が近づいています。雲尾坂での選手団と監督団の交差を避ける為、個々の間隔を詰め早めの頂上到着をお願いします。」そんな状況を想定していなかった私は笛木隊長の指示をそのまま大声で監督団に伝えた。するとどうであろう、今まで烏合の衆のようで非協力的な者が若干名いた監督団が頂上に向かって雲尾坂を個々の間隔を詰め急ぎ登り始めた。何という変わりようであろうか。私は最後尾の監督と3m開いた間隔を最後まで詰められなかった。いつも高校生の部員と行動を共にしている監督の強さを思い知らされた。脱帽。再び笛木隊長から「もうじき選手団の出発時間です。雲尾坂をいくらも登っていないなら、交差を回避する為、お花畑まで戻ってそこで待機して下さい。」その隊長の指示を受容れば必死に頑張っ

て登っている監督達は激怒するであろう。私は急登に喘ぎながら答えた。「私の高度計で2050mを越していて、頂上へはあと10分程で到着するかと思います。このまま頂上まで登らせて下さい。」

私の要請は受け入れられた。お花畑から急いで45分、10時25分頂上に到着する。その5分後、選手団の先頭の旗手達(本校3年生3名)が発

発していった。そして緊張の糸の解けた監督団の問題児2名は元の状態に戻った。

その後、ドラゴンドラへの下山中、千葉の選手の具合が悪くなり、丸山医師の点滴の手当てを受け自衛隊員に背負

苗場山頂上湿原



われて下山した。

・2012.8.10 三国峠、三角山(行動3日目) 「石川監督、悠然として動かず」

前夜の反省会で森田君と私から2名の監督の不行跡についての発言があり、バス乗車前、監督団を集め笛木コース隊長からやんわりと注意が伝えられる。「・・・支援隊員も人間なので非協力的な態度やマナー違反が続くと感情的にもなる。どうぞ協力願いたい。・・・」

99%の先生は真面目で情熱も常識もあり一生懸命なのに、ほんの2名の監督の為にこのような注意をしなければならないとは誠に残念なことであった。このようなことを無くす為、

・監督対応の2名の支援隊員は、抑えを効かせる意味で高校教師が当たる。

・選手団と同様に班編成し、その中から班長を委嘱したうえで班単位で行動してもらう。

ようにすればマナー違反、非協力的な態度は出にくいのではなかろうか。一考してもらいたいものと思う。また現在は、監督団はコース隊の中でお荷物的な扱いのようだが、コース隊の構成の重要な一部と考えればまた違った発想も出てくるのではないだろうか。

三国峠で左折し三国山の山腹をトラバース、三角山に登るあたりから今まで薄っすら立ちこめていた霧もなくなり晴れて気温上昇し暑い一日になる。平標山の家で、〇〇焼けした小柳総監督の激励を受ける。開催県の総監督も激務のようだ。前日、前々日のような事故、体調不調者もなく全員元気に平標登山口に下山し解散式が行われる。

最後に読図テストの答案が選手に返却された。他県の監督と違い、一人その場を悠然と動かない本校の石川監督の姿が際立っていて印象に残った。やるべき事はすべて事前にしてある。結果を見て今頃騒いでも仕方がないというスタンスなのだろう。



3)2012.8.11 閉会式 「老OBは涙が止まらない」

前夜、苗場プリンスホテルでの打ち上げで少し飲みすぎた。長岡工高の中村先生が反省会で私が述べた意見に賛同してくれたからだ。反省会で私は次のような参考意見を言った。「インターハイ登山のような競技登山は登山の中での特殊な一分野である。高校生にこれが登山の全てというような指導をされると、卒業後登山を継続するものは多くいないだろう。登山のジャンルは幅広く岩登り、沢登り、山スキー、高所登山など楽しく心震えることが沢山ある。折に触れこれらを高校生に啓蒙して行って欲しい。」中村先生に賛同の握手をされ、酔いも手伝い思わずハグしてしまった。

表彰式が始まる。順位発表は 6 位から始まった。年初から今まで山岳部の山行に 5 回同行し、選手の成長具合を見ている私は 6 位以内入賞を確信していた。だが、なかなか県央工高の名前が呼ばれず 2 位修道高校までの発表が終わった。毎夕、引継式での答案返却時、監督のなかで只 1 人その場を動かなかった石川監督の際立って悠然とした姿が頭の中に浮かんだ。「1 位になったのだ。」私は発表の前に 1 位を実感し臉が熱くなるのを感じた。吉田先生の花道を作ると言った昨年の「岳人」の記事、1 年生の時から新潟インターハイへの出場を宿命とし努力してきた 3 年生、石川監督を筆頭に顧問の熱血指導、いろいろなことを思い出し涙腺が緩みっぱなしになった。これはまずいと思いながら、ふと隣の若い OB を見ると目から涙が溢れそうになっていた。涙が出るほど感動しているのは私だけではなかった。私はほっとしながらバンダナで涙を拭いた。

吉田先生の意気に感じ、支援隊に参加しながらも膝を痛めてしまった若い OB3 名。治療に専念しているだろうか。膝痛や腰痛はくせになり易い。どうぞ、くせにならないように完治させ、また山に戻ってきて欲しい。そして昔のように山への情熱を再燃させて欲しい。卒業してゆく 3 年生は、山岳部で山へ登りながら遠くにいろいろな山を見てきた。今夏の夏山合宿でも剣、白馬、五竜、鹿島槍、針ノ木、穂高、槍、白山などが見えた。皆、個性的で素晴らしい山々だ。今後は自力で登ってみて欲しい。山岳部で培われた力が更に発展してゆくことと思う。そして将来、君達が 8000m 峰へ挑むことがあれば、私はよろこんでカンパに協力するだろう。気が早いことを思いながら、老 OB の今年の楽しく熱い夏は終わった。

(1 回生)

